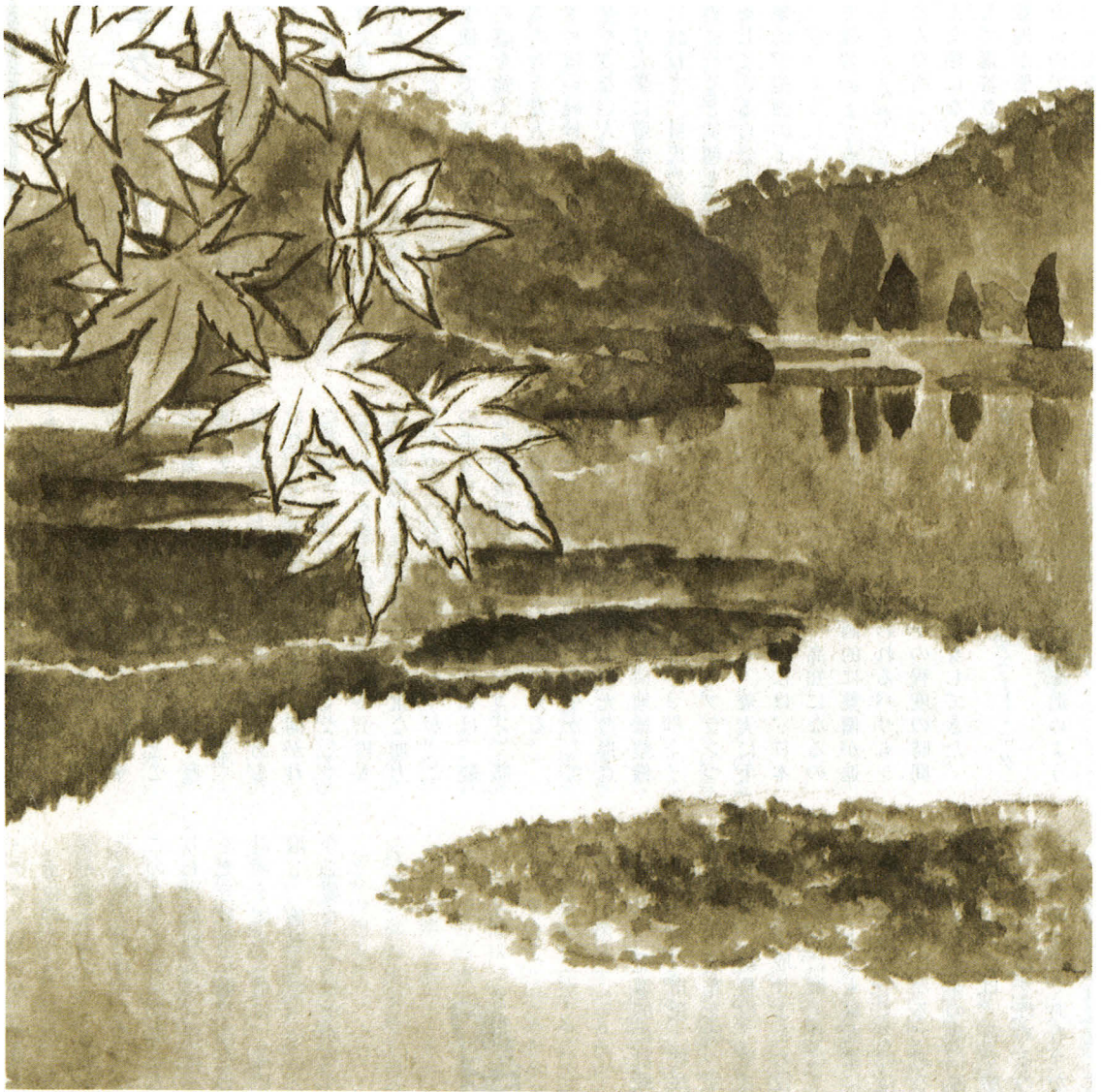


文化高知

'93年11月 NO.56



「秋」 恒石愁子

(財) 高知市文化振興事業団

計画づくりの

アプロプリエイト・テクノロジー

谷本 信

■アプロプリエイト・テクノロジーとは？

「アプロプリエイト・テクノロジー (appropriate technology)」の語は、世界銀行(ワールドバンク)の海外援助の用語でよく使われ、適応技術と和訳される。アプロプリエイトとは「適切な」の意味である。発展途上国の援助の場合、最先端技術を駆使した機器類の導入の援助では、地域のものにならず、むしろ聴診器のような素朴な機器の方が、地域に根づく意味で良い場合がある。最新の医療機器では故障などの管理も考えないと、地域に根づいたものにならない。この弊害に対して、その国の技術水準に適した技術が、アプロプリエイト・テクノロジーという訳である。

■ホスピタリティが売りの高知

地域の活性化を模索する仕事をするものの必須な資質は、地域に惚れる「たち」かも知れない。その意味

で、良い資質を備えているといえる当方ではあるが、お世辞抜きに「まっこと、こじやんと、高知はえいとこじや」と、知っている限りの土佐弁を使っている程、高知はいいトコロの感を強くしている。

気の合う友人の一人であるM氏は、書生っぽい純粋さと愛敬のある笑顔を絶やさぬ人であった。そのM氏がパリ大学に留学していたとき、下宿を訪ねて、M氏の顔つきに驚いた。海外に行くことと笑顔を絶やさぬ気配りをしていて自分と比して、M氏の攻撃的で能面のような顔を見た当方は、びっくりして「おいM、お前まるで般若のような顔をしているぞ。どうしたんだ」と素朴に聞くと、「こんな所(パリなんか)にいるとこんな顔になっちゃうんだ」と仏頂面して返答された。M氏がいうのに「意地が悪いほどパリは人間関係が冷たいので、構えて生活している内に、こんな面構えになっちゃうんだ。

パリになんか長くいるもんじゃないうよ」とのこと。

このパリの対極にあるのが、土佐ではなからうか。それは人に起因するものである。自然が豊かなところ、美味しいものがあるところ、歴史や文化のいぶきを感じるどころ、何れも魅了される地域の要件であるけれど、人懐っこさなどの開かれた心やホスピタリティ(もてなしやその心)を相手に伝えられる土佐人は、何物にも代えがたい貴重な能力をもっているのではなからうか。このホスピタリティ溢れる高知は、観光や会議開催(コンベンション)都市の資質が多分にあるといえる。

これからは、この能力を生かして高知をコンベンションや観光の拠点として位置づけて計画的に地域整備を進めていく必要がある。

このためには、マスタープランづくりが必要不可欠である。着実に手を打てば、二十年程度後には、日本の中で最も素敵な所、高知になるのは必然であろう。計画的に整備が進んだモデルの如くいわれるパリもシソガポールも共に、その程度の時間で素晴らしい都市に変身してきた。

■計画づくりのアプロプリエイト・テク

高知で実行性ある計画を進めようとするとき、何がアプロプリエイト

・テクノロジーか、を考えてみる。土佐の人は、何か一言いわないと気が済まない「一言居士」である、と土佐人自身から聞いたことがある。このような性向があるとすれば、とりわけ高知では、住民・市民の意見を充分計画に織り込む必要性が高い。計画を固める前に、前広に意見を聴取し、調整を図っていくことこそ、今必要なのではなからうか。



行政は、先導的に計画をつくって行くよりも、市民・住民の意見を把握しつつ、調整を図っていくコーディネート(調整役)やスーパーバイザ(全体の取りまとめ役)の機能で、音楽づくりに例えれば、行政は作曲家というよりも編曲家になる必要がある、原曲をつくるのは市民や住民ということになるであろう。ただし、都市計画や建築の専門家でない市民や住民だけでは、荷が勝ちすぎるから、その空隙を埋めるのは、行政やシンクタンクであろうか。

(助高知県政策総合研究所研究部長)

野球と高知

別役 実

父親の出身地は高知であるが、自身は満州で生まれ、引き揚げてきて一年ほど高知に住んだものの、以後、静岡、長野と移り住んで、現在は東京にいる。いつてみれば、根無し草のようなものだろう。

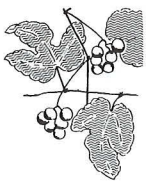
小学校の四年から高校を卒業するまでという、多感な時代を長野で過ごしたから、そこが第二の故郷のようでもあり、性格もそれにふさわしく形作られたようで、時に「長野県人ですか」と聞かれたりする。もちろん今となっては、東京に住みついている時間が最も長く、旅をしているのも東京に帰ってくる、何やらほっとする。ホームグラウンドに帰り着いた気がするのである。

しかし、にもかかわらず春と夏の高校野球は、高知のチームを応援してしまふ。何故かそうなのだ。そしてその時、「ああ、私はやっぱり高知県人なのだ」ということを、身に

しみて理解する。もちろん、私が高校時代を過ごした長野は、野球が弱いということもある。現在、私がホームグラウンドと考えている東京では高校が余りにも沢山あって、どれも郷土の代表という気がしない、ということもある。

ただ、恐らくそれだけではないだろう。私が高知にいたのは、昭和二十一年の夏からほんの一年ほどで私自身もまだ小さく、道具もなかったから、野球などとした覚えはなく、誰かがやっているのを見たという覚えもないのだが、それでも何故かあの高知の夏の炎天下は、白球の飛び交う野球の情景となって、常に思い出されるのである。もしかしたら高知は、特にその夏は、野球にもっともふさわしいのかもしれない。

「夏が来れば思い出す」という歌があるように、私は夏の暑いさなか、東京の街をうろつきながら、甲子園



の高校野球大会を伝えるどこかの電気屋のテレビの、カーンという打球の音、ワーッとという喚声を聞くと、とたんに高知県人になる。そして、遠足で行った桂浜や、五台山や泳ぎに行った鏡川のことなどを思い出すのである。

先日、エストニアから日本の中世文学を研究するためにやってきた学生に会った。エストニアというのは例のバルト三国の中のひとつであり、長い間ソ連に占領されていたから、国民の大部分はエストニア語のほかにはロシア語が出来なければならず、文化的にはフィンランドとも近いから、フィンランド語も出来なければいけないらしい。その上、ちょっとしたインテリになると、それ以外に英語とフランス語とか、独語とか、「ほぼ五カ国語は話せます」というのである。

「それじゃ、母国語が何なのか分

からなくなりますね」と私がいうと、「でも、夢はエストニア語で見ますから」と、彼は答えたのだ。つまり、このような複雑な環境に置かれると人は、「自分は何語で夢を見ているか」を探ることにより、自分の母国語が何で、母国がどこであるかを確かめているのである。

こんな妙な話を持ち出してきたのはほかでもない。このことと私が高校野球を見て出身地を確かめるのが、ほんのちよつと似ているような気がしたからである。私は日本語しか知らないから、何語で夢を見ているかなど、探るすべもないし、第一、夢に言葉が介在すること自体、思いも及ばないことであるが、恐らくそういう人間は、高校野球を見て、無意識にどのチームをひいきにしているかを探り当て、それによって自身自身の真の出身地を自覚することになるのだろう。

エストニアに限らず我国でも、多くの人々が根無し草にされつつある。従って私のように、思わず肩入れをしてしまった後に、その県の出身者であることを痛切に思い知らされているものも、決して少なくはないはずである。私にとつての高知は、そのようなものであり、ほかにどうしようもないものである。

(劇作家・童話作家)

一本のカワウソの毛

町田 吉彦

哺乳動物の調査は難しい。シャイな彼等のほとんどは夜行性で、直接観察には相当の覚悟がいる。そこで、調査は彼等の生活の証を執拗に探し回ることから始まる。証拠は何か。足跡、食べ残し、そして糞である。

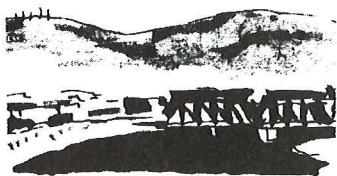
四本指の中型の足跡なら、イヌ科の動物である。県下では、キツネより数の多いタヌキの疑いが濃い。野犬も結構多い。即断は厳禁である。五本指となると、ネコ、ハクビシンに加え、イタチ科のアナグマ、テン、イタチ、カワウソが浮上する。紛らわしいのはイタチとカワウソである。イタチの足跡は指が平行に近く、幅はせいぜい四センチ、カワウソは指がやや開き気味で、幅も七センチ程になる。獣の歩行速度、土質、前足か後足かによっても足跡は随分異なる。即座に判定可能なのはイノシシの蹄と、後足の跡がベタンと長いノウサギぐらいしかない。

カワウソは大きな魚は腹部のみを食べ、他を残す習性がある。この食べ残しにもすぐさま他の獣や鳥、そして蟹が群がり、余程の幸運でない限り新鮮なものはまず期待できない。糞こそ最も貴重な情報源である。カワウソは魚、海老、蟹が好物で、糞は未消化の骨と甲羅の固まりとなる。小鳥の羽や、鼠の毛を含むのはイタチやテンの糞である。テンは魚を食べないが、イタチは時に魚、海老、蟹を食ふ。この糞が曲者である。イタチの糞は最大で直径八ミリ、カワウソでは一センチ以上になる。八ミリ以下の怪しい糞は誰の仕業か？

手段はただ一つ。ひたすら獣になりきって地面にへばりつき、クンクンと匂いを嗅ぐしかない。カワウソの糞には獣特有の鼻の奥をツンと刺激する嫌な臭いが無く、不思議とむしろ爽やかな魚臭しかない。もちろん、古い糞ならほぼ迷宮入りとなる。

昨年十月二十二日、糞から出た長さ僅か八ミリの一本のカワウソの毛が世間を騒がせた。三月十日に発見されたこの糞は、直径十五ミリ、内容物も典型的なカワウソのものだった。が、ニホンカワウソの最後の記録は昭和六十一年の土佐清水市の死体である。今度は死体ではない。公表には徹底した裏付けが必要であった。

五月中旬の深夜、カワウソ仲間九州大学の佐々木浩さんから電話があった。珍しく興奮している。三月十日の例の糞に毛が一本入っており、イタチの毛と違うらしいとのこと。飼育の経験があるとベ動物園園長の山崎泰さんの鑑定でも、断定は困難であった。日本産の獣の毛の研究は皆無に近い。ヨーロッパの文化はさすがである。すべての獣の毛の垂直



断面と、表面を克明に観察した書物がイギリスにある。しかし、問題の毛は表面の痛みが激しく、この書物でも、剥製のニホンカワウソの毛との比較でも鑑定は困難だった。加えて、イタチとカワウソの毛の垂直断面像の差は微妙である。果たして垂直に切断すべきか。

思わぬ情報が入った。宮崎大学にいる友人の岩本俊孝さんが世界で初めて毛を斜めに切断して電子顕微鏡で観察し、論文を印刷中とのこと。急遽原稿を送ってもらった。これはイケル！斜めの切断は見事な発想の転換である。嗚呼、悲しい哉！所詮体力派の私と佐々木さんには電顕の技術がない。電顕を自在に操る同僚の奥田一雄さんをそのかし、我々は助手役となった。水熱化学実験所の柳澤和道さんと井奥洪二さんの支援も得られた。イタチとニホンカワウソの剥製の毛を抜きまくり、違いが確認できた。

さて本番、毛は一本。処理を誤れば、一二人の調査参加者の苦労が水泡に帰す……やがて、電顕に映った毛の断面に疲れ果てた三人が思わず歓声を挙げた時、お城下ではよさこい祭りのフィナーレが間近となっていた。

(高知大学理学部教授)

『越境の倫理学

—異質なものととも生きる方法—』(下)

今福 龍太氏講演から

言語学の言葉に、「クレオール」(混成言語)というのがある。これは、二つ以上の言葉が出合った時に混じり合って全く別の言葉になることをいう。クレオールは、二つの言葉が出合うと必ず起こるものであり、ここでは言葉だけでなく文化も混じり合うのである。ハワイやカリブなどでは、英語に日本語やスペイン語などが混じり合うことで独自のクレオールのな言語が発達している。これらの地域では、言葉とともに日本の文化やスペインの文化が溶け込み、独自の発展を遂げているのである。日本においても、帰国子女や日系人など、これまでの日本人とは違った考え方を持った日本人が多く見られるようになった。また、白人やアジア人の中にも流暢な日本語を使う人が増えてきており、いろいろな日本語が生まれている。日本語も日本人も多様化しているのである。しかしながら日本人は、確たる日本人や美しい日本語があると考えており、国も日本の文化や日本語が変質しないよう管理しようとしている。しかし、言葉や文化は法律などでコントロールできるものではないことは明らかだ。我々が、「美しい日本語や日本文化を守るのだ」と考えるのか、「言葉や文化は変わってゆく中で新しい力をつけるのだ」と考えるのか

で、日本人の在り方も随分変わってゆくのだろうか。

「旅」や「クレオール」はまさに「越境」であり、文化の受容性は、その文化がどれだけ越境できるかにかかっているといえよう。「越境」と似た概念に「国際化」がある。越境と国際化はどう違うのであろうか。国際化というのは、国と国がどうかかわってゆくか、あるいは日本人とアメリカ人がどうつきあっているのかというように、前提として国や人種がある。越境とはまさにこの国や人種などの境を越えることなのである。



最近多くの日本人ビジネスマンが海外で仕事をしている。ニューヨーク郊外のある住宅地では、日本人ばかりが集まりはじめ、日本人村の様相を呈している所がある。多くの日本人が居住し、そこからニューヨークへ通勤するのだから列車は日本人ばかり、読む新聞は日本の新聞で、食事は日本料理店で寿司を食べる。食料品はスーパーに行けば日本と変わらないものが手に入るし、子供た

ちは日本人学校へ通うといった具合である。国際化する中、アメリカ人は閉鎖的になっていくという皮肉を生んでいるのである。「越境」を説明する際によく「住所の感覚」というのを使う。つまり越境というのは、自分の住所の感覚が国の枠にとられず転々と移動することをいうのである。これに対して、日本人はどこに住んでも意識の住所は日本から動くことはないのである。だから、外国にいても日本と同じ生活をしようとする。このことが、日本人は閉鎖的だといわれることにつながっているのである。

これからの社会にあつて、自分や人種などによって規程することは、自分の中に脆さを抱え込むことであるといえよう。我々は、別のものによって自己を規程しなくてはならないだろう。そしてそれは、自分の人生においてどのような道をたどり、そしてどこへゆくかとしているのかを考へる上での道しるべにならなくてはならない。我々は意識の上で越境し、お互いの旅の物語を認め合う態度が必要だ。一人ひとりがある程度の物語を持っているのかを知り、同じ物語を持つ人々が手を取り合って生きてゆく姿が見え始めていくのである。

「こつも焼」から

「らへらへHAPPO」へ

新田 文江



「水清く、緑豊かな四季をとおして小鳥の声を聴く北川村は木積の里に昭和五十九年開窯いたしました。安芸市内原野の粘土を主に、近在の土を用い、日用陶器の新しい美と伝統創りに励んでおります。」

又、手の不自由な人のらくらく食器や、土味そのままの茶器、花器等もご注文に応じ作らせていただきます。中岡慎太郎生家にも程近いこの山里にも是非一度お越し下さいませ」

ここ十年間、この「こつも焼案内」カードを無用にしないよう努力してきましたが、十年という歳月は、少しづつ、海のもの、山のもの、区別をはっきりさせてくれたように思います。東京の大学の勤めを辞めて、陶工で故里での生計をと、おそらくこの地域では私が初めての

試みは、「手づくりあつたライフ時代」の流れもあつてか、次第にマスコミにも注目され、県内外から沢山の方々、小さなこの山里の工房を訪ねて下さるようになりました。

地域の親しい人々の関心も急速に高まり、念願の穴窯構築の際には、皆さん大勢手伝いにかけて下さって、結局、みんなも自作を入れ交代交代で七昼夜を焼き上げ、初窯出しにはどつと歓声を上げるという、まさに過疎地域ならではの美しい協力関係を生み出しました。

そしてそれから間もなく、熱心な人々の間に、自分達独自の窯を持って、更に広い文化交流の場にしよという気運が高まり、メンバーの一人山下さんという方が快く中岡慎太郎生家近くの土地を提供して下さい、忽ちまた立派な新窯を誕生させ、慎太郎窯交遊会と名付けて、村内外に三百人もを会員を持つ、温かい手づくり交遊の場が平成三年に実現しました。

更に間もなく、手づくり文化の夢を一層ふくらませ、次第に自信のついた技法も生かして、来春開館予定の中岡慎太郎館から、全国への発信作品として、私の父が、自身一級障害者の体験をもとに、工夫改良を重ねて完成させ、既に全国的な評価も得ている「手の不自由な人のらくらく食器」の一部量産化を引き受けてくれました。

現在まだ世界的にもほとんど手付かずといわれるこの種の食器をとおして、真の「あつたか福祉」からひいては「村おこし」の実際活動にもつなげようと、村内会員八名の方々が集まり結成されたのが慎太郎窯「らくらくHAPPO」グループです。

ます。高知市からの若い息吹を待っています。

(梶原町若者定住対策審議会会長)

開援隊

坂本 寿彦



「開援隊」、カイの字が間違いいではないか？と思われるかもしれないがこれでいいのだ。

「開」を使ったことにはそれなりの意味がある。森林を開き、人を開くという意味だ。「援」には樹木の生長をたすけ、林家を援けるという意味がある。

それでは開援隊とはいったい何なのだ。実はこれ、池川町の森林組合で働く若者(?)の集団なのです。

林業という職種は労基法適用除外の業種なのですが(平成六年三月まで)、これでは後継者は育たないということで、社会保障制度の充実、労働の軽減を図ろうと町役場の助成を得て、3Kなどという有り難くない形容詞を頂戴した林業界の、暗いイメージを打破しようと三年前に発足したのです。

当時、三人だったメンバーも今では九人に増えました。全員Uターン組です。

メンバーの元の職業はといえば調理師、セー

過疎とかいわれる山間地域にも、こうしたわくわくライフの夢は、いっぱいあるのです。

(こつも焼窯元)

今、梶原が面白い

矢野 博正



「梶原」と聞いて、どんな所を想像しますか。とにかく辺境の地、南国土佐に在りながら雪が降る、災害のよく起こる所。そんなイメージを持たれる方も大勢いらっしゃるでしょう。私は梶原町で生まれ育ったわけで、国道197号線の全線改修によって、とても高知市が近くなり、もうそんなイメージが無くなっているだろうと思っていました。

ところが、梶原に赴任された県職の方に意外なことを聞かされました。

彼は、新しく県職員となり研修期間も終わろうとした時、赴任先が梶原町と知らされたのです。彼にとつて梶原町とは、ほとんど地の果て、鳥流しの如き場所であつたようです。彼は、その職を辞すことさえ考えたといっています。二年間の赴任期間というものが彼を今浦島にしてはしまいか、などと切々と語ってくれました。しかし、実際に赴任してみると高知市から二

ルスなど様々です。年齢は三十歳から四十四歳までいますが、皆明るくいい奴ばかりです。

さて、開援隊は具体的になにをやっているのかといえますと、木材搬出にはじまり、製材工場、建築、作業道の開設、森林の保全に関する業務、各種補助事業の業務など、森林組合の各部門で働いており、将来それぞれのリーダーになる存在だと思えます。

メンバーのなかに調理師がいると書きましたが、夏には石を使って焼肉、アメゴのどて焼き、冬にはイノシシ鍋などを山でやります。

竹爛というのを知っていますか。その名とおり竹の筒で酒を沸かすのです。竹の樹液が酒に混ざって何ともいえない味と香りを醸し出します。

開援隊の行事のひとつに小学生を対象にした林業体験学習があります。下刈り、枝打ちなどをやっています。

今年参加した子供の中に「おんちゃん、僕は学校の勉強よりこつちが面白い」と言ってくれた子供がいて嬉しくなりました。

去年は「危ないけ鎌を振ったらいかんいうてお父さんにいわれちゃう」という子供がいたのです。

残念なことですが、池川のような山村でも最近の子供達が山へ行って山林作業をするということがなくなりました。池川で育った子供の思い出に山で汗をかいたことがない、というのは森林を守り育てる側の我々にとつては寂しいことです。

来年も必ず林業学習をやるぞ。

(森林組合職員)

時間不足であり、情報生活もほとんど変わらない。仕事面では、職員数が少ないのでかえって全体の仕事ができ、経験の幅が広がって面白い。

だが、満足できない部分もある。それは職域以外の付き合いが少ないことである。このため彼は、夜はほとんど学習に励み、休日は高知市で過ごしている。

そんな彼が、我々の企画に初めて参加してくれた。私の所属している梶原町若者定住対策審議会は、二十歳代から四十歳代までの男女十名で構成され、職種も農林業、商工業、公務員そして主婦までと梶原町の産業と暮らしを代表するものである。

この会は通常の審議会と異なり、考え実行する団体である。将来を見据えた若者の住みやすい町づくりと、差し迫った花嫁対策が主なテーマである。一年間に五十回を超える会合をもち、アンケートを含む現状と住民意識、また都会で働く若者への調査や町に対する提言づくり、若者同士の交流会の企画などを行っている。この第三回の交流会に彼が参加してくれたのである。

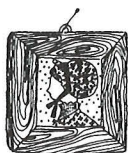
第一回目は瑞穂スキー、第二回は太郎川公園花見、第三回はボウリング大会(台風のためホエールウォッチングを変更)、そして今回は長野県へのスキーツアー、彼も次回への参加に意欲をみせている。

この会は、いわゆるお見合いではなく、広く若者が交流できる場であり、大いに楽しみ人生の幅を広げることを目的としている。

今、梶原もいたるところで若い芽が吹いてい

八十年の今

真鍋 しげ



父が新天地を求めて常夏(ときどき)の島台湾へ渡ったのは明治の末で、落ち着き先の基隆は私の生まれ育った所だけに、何となく未だに郷愁を感じます。着物に袴の小学生の頃、また昭和の初めセーラー服で嬉々として通った女学生時代、母校の小学校に赴任して希望に燃えながら子供達と過ごした事など、不況ながらも平和な暮らしの日々だったことを思い出します。

満州事変の勃発で世情がざわつき始めた頃から私の青春も消えていってやうです。

続く支那事変(日中戦争)による台湾軍の出兵で、多くの知人や身内からの応召出征で戦時色も濃くなり、戦争はアッという間に止まるところを知らず太平洋戦争へと火蓋は切ら

れ、港町は日の丸の旗の波に軍歌がひっきりなしの騒然とした毎日となつて、私達も銃後の守りとして巻き込まれていきました。

結婚して間もない夫も、台湾空襲に備えての防空監視網の要員として応召、私も疎開分校へと移ったものの台湾沖の米艦艇やフィリピン基地からの連日連夜の空襲爆撃で、学校は勉強どころでなく防空壕への待避に明け暮れ、頼みの高射砲も射程が届かず、ただじっと壕の中で息を潜めて耐える毎日です。

物資は目に見えて欠乏していき、続く耐乏生活にも不平ひとつ洩らすず黙々と「勝つ迄は」のもとで忍びましたが、戦況は刻々と暗いニュースで知らされ、戦傷病兵や遺骨を迎えるたびに口には出せぬ絶望感と不安が全身を包んでいくようでした。

終戦の詔勅で敗戦を知り、張りつめていた気力も一挙に抜け、軍備に行政にと接収の続く情勢の中で、心の支えを失った私達は右往左往して今後のことを考える心の余裕もない有様です。

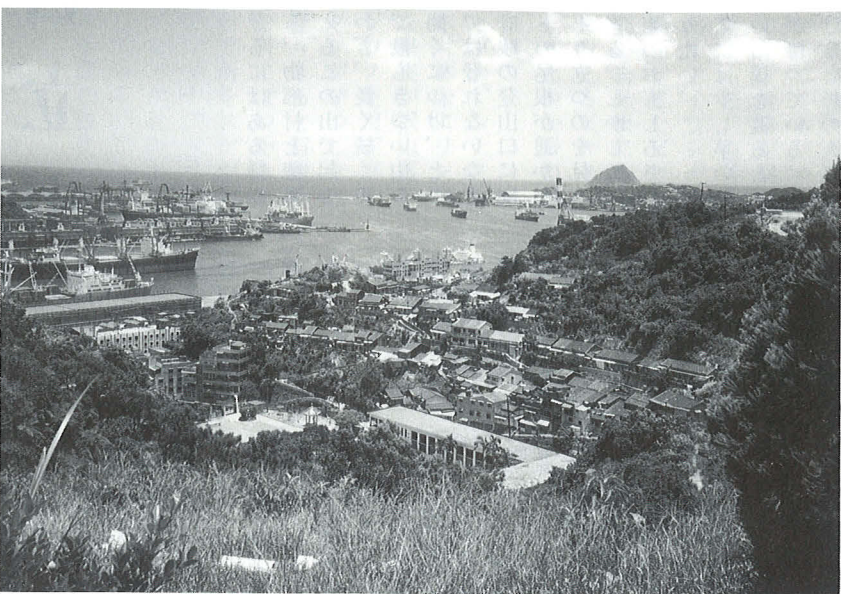
復員した夫との無事を喜び合う間もなく、元の勤務地へと向かったのですが、早組の内地引き揚げが始まっていた頃でした。私達は会社での微用抑留で任務も一年延期され、解除の日を待ちながら日本人の少なくなっていく町でどんなに心淋しく不安な気で過ごしたことが。

微用解除で慌ただしく引き揚げ準備を始め、追われるように基隆行き列車に乗り込み、集結地の岸壁倉庫で待機、やっと夕月(元駆逐艦)に上船出来たのは昭和二十一年十二月の初旬でした。

子も教育者として巣立ち、良い人にも恵まれて幸せな家庭を持ち高知へ住みつくようになりました。

定年を迎えて、第二の人生を自分なりに見つけた夫と二人暮らしになり、初めてのゆとりの時間に、私は手を拱ねいて何をするともなく、趣味一つ持てなかった往時を振り返って今更に悔やまれる日々で、奇しくも終戦を境に六十六の年齢が二分されて、いることに気づき、それからの老後生活を思い知らされたのです。

ある日のこと、図書館からの点訳ボランティア養成講座の募集が目につき、「点訳とは何だろう」と興味を持ったのが私の点訳へのきっかけになったのです。老の手習いよろしく初めて見る点字の五十音か



基隆港(昭和58年)

ら取り組み、本点訳になれば好きな読書しながら一石二鳥と、少しの間も惜しんで終了を目指しました。待望の本点訳に漕ぎつけコソコソ

一字ずつ仕上げ、製本された点訳本を手にした時の嬉しさはまた格別で、いつの間にか楽しい日課となっていたのです。心に残る素晴らしい本

との出会いや点訳中の無私の境地、他では得られない醍醐味です。

点字から本タイプへと少しずつ便利になったものの、仕上がるまで時間を要することや誤字その他の修正の不便が悩みの種でした。今は世の中スピード時代です。点訳も流れにそってスピード化され待望のパソコンが館にも導入された時、勇気を出して挑戦してみたところ、今までの悩みを一掃してくれるその便利な機能にすっかり取り憑かれたのです。

仲間の方々に助けられながら練習を積み重ね、キイの操作にも次第に馴れて点訳出来るようになって、以前にも増して楽しくその面白さに病みつきになって今日に及んでいます。土曜日の校正者グループの会にも出席し、時には一日も早く利用者からの希望の本を手分けして点訳したり、私には小さい社会参加にもなる唯一の外出日を何よりの充足日としています。

点訳を始めてから十五年! 館をはじめ仲間の方に支えられながら心の安らぎの場を与えられ、人生八十年を二人揃って迎えた今、それぞれの好きな道で見つけた老後の生き甲斐をしみじみと噛みしめています。

(点訳ボランティア)

いよいよ出航、埠頭を離れ静かに動き出した船室で、リュックサックに凭れて横たわっていると、三十余年の思い出尽きない基隆との別れが切なく胸をよぎり、夕闇に遠く消えていく島影が眼に浮かぶよううで声にならぬ呟きで「サヨナラ」を告げました。

二泊三日目の早朝、長崎の南風崎に入港、引き揚げ列車に揉まれながら香川の叔父の家に辿り着いた時は師走も半ば過ぎて、寒さと馴れぬ生活に身心共に冷えきった毎日でした。長居も許されないと決意し自活の道を高知へ求めたのです。

土讃線の風景もろくに目に入らず煤煙で真っ黒になって安芸駅に着いた時、二月とは思えぬ暖かさは南の島育ちの私達には何よりのプレゼントに思えたものです。

辛い職を得て間借の生活を始め一息ついたのも束の間、私の入院生活で言葉に尽くせぬ苦勞を夫にかけながら目を瞑っての療養生活が続き、快復後は専ら主婦業で、朝鮮戦争による軍需景気にOLや家庭婦人のパート進出で活気づく世間をじっと傍観の暮らしです。

高知へ夫が転勤後、引き揚げのハルデイを背負いながらも私達なりの落ち着いた生活が出来、成長した息

市民フロアを

ご利用下さい

広さ・内装

96㎡、壁面布クロス張り、スポットライト完備

使用時間

(一)展示 午前九時～午後六時
(二)会議 午前九時～午後九時

使用料

(一)展示 一日一、〇〇〇円
一週間七、〇〇〇円
(二)会議 午前九時～正午 四、〇〇〇円
午後一時～五時 五、〇〇〇円
午後五時～九時 五、〇〇〇円

所在地

高知市はりまや町一―五―一
デンテツターミナルビル五階

お申し込み

本町五―二―三 自治会館二階
(財)高知市文化振興事業団
(電話 七三―四三六五)

高知の山と森 (十)

石立山

西村 武二

石立山は初めて登るにはある種の覚悟がいる山である。物部村と徳島県木頭村境にそびえるこの山で起こった数々の遭難さわぎ、長く続く急傾斜の岩稜、四国で最もきつい山など、これらの話を聞くにつけ、とても生半可な気持ちでは登れないと思うのである。別府峡の登山口に向かう途中でもルート上の尾根が遙か上空に陽を受けてそそり立つのを見ると、ためらいがよぎる。しかしこの石灰岩の山の植物相のおもしろさを感じれば、一度は登りたい。

十月の初旬、紅葉には少し早い時期に出かけた。赤い吊橋を渡る時、大きな急登の階段が待っている。広葉樹の若い林を抜けると杉の人工林にはいる。つづら折の暗い道端には淡青紫色のアキチョウジや目も醒めるばかりの朱色のフシグロセンノウが、つらい登りをなぐさめてくれる。

一昨年の19号台風は九州北部の森林に未曾有の風害をもたらしたが、このスギ林でもその爪痕が見られた。幹なかに断ち切られたもの、湾曲して梢が林床に付いているもの、傾斜したものの、根倒れのものなど、様々な被害木がほとんどそのままの惨状をさらしている。周りの広葉樹林には被害がみられない。同じ場所のスギ林でも被害の全く無いところもあり、別府峡の複雑な地形が、風の向きを様々に変え、収束させて風力を強め、あるいは拡散させて弱めるのか、被害は局所的にあらわれている。

登るにつれて別府峡本流の瀬音もだんだん遠のき、尾根を乗っ越してリュウズ谷の斜面にはいると急に別の方向から沢の水音が聞こえだす。スギ林が途切れ、落葉広葉樹の溪谷林を緩やかに下って、沢身に出る。

の立枯木はヒノキであろうか。やがてヒメシヤラ、ツガ、ミズメなどの大木が茂る平坦地に出る。一息つけるところだ。この先も傾斜の緩い歩きやすいところではヒノキやコウヤマキの大木が出てくる。やがて石灰岩の露岩にでる。展望が開けるので誰もが休むところだ。白髪山や三嶺が少し頭を出す。イワシデなどが生える岩場は短く、またビヤクシンの瘦せた急傾斜の岩尾根になる。岩稜をまたぐように生えるビヤクシンの根が岩をがっしりとつかむ力感には目を見張る。

傾斜が緩くなるとブナ、シナノキ、ミズナラが出てくる。林床にリンゴを小さくしたような果実が沢山落ちている。オオウラジロノキだ。ブナ林の林床にはスズタケがびっしり生えている。ここを登りきると石組みの見事な庭のような所にぽっかりとでる。白い岩の要所要所をスゲがおおい、ウラジロモミ、ブナ、ドウダンツツジ、リョウブなどが岩の上や割れ目に根を下ろしている。ザックを下ろしてゆつくりと庭を觀賞しよう。

ここから先は傾斜も緩くなり、テンニンソウ、メタカラコウ、イシダテクサチバナなどの群落がある。三嶺も白髪別れの稜線の向こうに全容を見せるようになると頂上も近い。

ここまで約三〇〇メートルの登り。ひと休みする場所だ。これから先の登り一方の長丁場を思えば、ここで水はたっぷり用意しなければならぬ。晴天が続けばこの沢は涸れて水が汲めないことがある。対岸にはカツラの木がそびえている。黄葉の頃にはこのあたり、カツラの葉の甘い香りが立ちこめることだろう。沢を渡るとハガクレツリフネの小群落がある。その名前の通り葉に隠れてぶら下がるおもしろい花のつくりに感心する。ジグザグに斜面を登って尾根に出る。勝負はここからである。あとはこの急峻な尾根を忠実に登ればよいのだが、それは登攀と呼ぶにふさわしい。ほんの短い岩登りをするような所も多数でてくるが、岩尾根をまたいで木が生えているので恐怖感はない。やがてこの山の植生を代表するビヤクシンが現れてくる。岩尾根という厳しい環境で長年の風雪にいかにも耐えてきたというふうには乾かぬ、枝は盆栽のようにならめられ、サルオガセも垂れ下がっている。庭木に使うカイヅカイブキはこの木の園芸品種である。見慣れない針葉樹の大木があるので見上げるとネズミサシの大木だ。この木は花崗岩地帯のような乾燥しやすい瘠悪な土地に自生するのだが、こんなところにもあるのか。白骨状

ツルギミツバツツジ、ゴウウツツジの低木林をくぐり、ウラジロモミが立ち並ぶ北峰に達する。ここまで登山口から三、四時間はかかる。このピークの東側に捨身滝という石灰岩の断崖が徳島県側の高の瀬峡へ一気に落ちていく。その名の通り、修験道の行場だったのだらう。前回ここに来たときは強風が吹き荒れ、バランスを崩すほどだった。へっぴり腰で岩稜の先のコブまで行き、谷からの風に乗って舞い上がる紅葉を眺めているものだ。今回は穏やかな快晴に恵まれた。ここから南のほうには間近にこれから登る石立山のドーム状の頂上が見える。北の方を見渡すと、次郎笈から高の瀬、白髪別れへの稜線が

続き、三嶺はその稜線の向こうにそびえている。高の瀬峡をジグザグに



石立山頂上のダケカンバ林

登ったスーパー林道は中腹を引き裂き、次郎笈の懐に消えている。剣山は次郎笈の向こうに重なってはっきりとは分らない。

高の瀬のピークの下に岩場らしきものが見える。あれが伊勢の岩屋だろう。明治の初めごろ、伊勢の安蔵という行者が白髪山の南麓から剣山への山道を開いた。あの岩屋に泊り込みながら、大ダワを振るって道を切り開いたという。剣山から三嶺にかけての縦走路中、水が容易に得られるのは次郎笈の北面と伊勢の岩屋だけである。彼は全く素晴らしいルートを開いたものだ。捨身滝にはギンロバイがかつて沢山生えていたそうだが、盗掘されて絶滅してしまったという。今でもこの山域のどこかにひっそりとかがやいて生き残っているだろうか。イワ

山本 大著	四六判一六八頁
幕末の青春 坂本龍馬の生涯	定価一、二〇〇円
依光 裕編著	四六判 三九頁
珍聞土佐物語 上下巻	定価一、六〇〇円
鈴木文彦・井本正人・関根猪一郎著	A5判一三六頁
協同組合と地域づくり	定価一、〇〇〇円
外崎光広著	A5判四四頁
土佐自由民権運動史	定価二、八〇〇円
外崎光広編	A5判三四四頁
土佐自由民権資料集	定価三、〇九〇円
土居重俊監修	B6判一三〇頁
高知市文化振興事業団編	定価一、〇〇〇円
土佐弁 土佐日記	定価一、〇〇〇円
岡林清水著	四六判二七八頁
高知県文学散歩	定価一、八〇〇円
高知の文化を考える会編	A5判一八八頁
高知の文化を考える	定価一、二〇〇円
高知市文化振興事業団編	A5変二三四頁
わがまち百景	定価一、二〇〇円
筒井広道著	A5変二五六頁
画帳の歳月	定価二、〇〇〇円
土居重俊・浜田数義編	A5判七三六頁
高知県方言辞典	定価六、一八〇円
高木啓夫著	B5変三四六頁
土佐の芸能	定価四、九四四円
清水孝之著	A5判三六頁
中山高陽	定価三、九一四円
清速幸男著(高知レポート5)	A5判一二二頁
高知県の工業	定価一、〇〇〇円
今井嘉彦著(高知レポート2)	A5判一〇八頁
河川はよみがえるか	定価一、〇三〇円

ツクバネウツギ、イワシデなどの低木がこの岩場には生えている。ムシトリスミレも近くの岩場にあるというが、私はまだ見ていない。

北峰から南の本峰までは二十分ぐらいでつく。スズタケが背丈ほども茂っている。ルートを見失いそうになる。要所の木の枝や幹にビニールテープの目印があるのでそれを頼りに行けば心配ない。頂上はスズタケがびっしりとおおい、頂上北側はダケカンバの林となっている。これは昭和二十九年(1954)ササが一斉に枯れ、その跡に発生したという。現在樹高は高いもので八から一〇メートルぐらいであろうか。

頂上からの眺望は余りよくないが、それでも南の方を望めば、香長平野の西部、桂浜、横浪半島方面が逆光の中に見える。してみれば下界からこの山は見えるはずだ。

石立山は高知管林局の学術参考保護林にも指定されている石灰岩地帯特有の豊かな植物相を誇る山である。植物に興味のある方はぜひ登ってほしい山である。別府峡からのルートはなかなか厳しいが、それでも息抜きできる平坦地は用意されている。まさに「寄らば大樹の陰」、巨木が茂る森林の中では本当に安心できる。

(高知大学農学部助教)

キブツの子どもたち

江島 民恵

キブツの子どもたちは、以前に述べた共同生活の場で育てられていますが、日本でいう施設や家庭を離れての生活というイメージでは、全くありません。キブツそのものが大家族である子どもたちにとっては、他に類例があまり見られない恵まれた教育環境にあるといえます。

子どもが生まれると日本よりも割合と早い時期に保育園へ通い始めます。早い乳幼児で二、三カ月、ちょっと日本の感覚では、驚かれるかもしれないませんが、イスラエルの婦人は遅く産後二、三カ月では、ほとんどといってよい程、通常どおりに回復し働いています。そのこともあり、早期に集団生活の中に子どもたちは入ることが出来ます。このことが一つ、後々の良い結果にいたっているような気がします。

その良い結果の一つとは、子どもたちは、保育園では日本と同じように一才未満、一才一才まで等、キブツにより多少の違いはありますが、年齢別に過しています。その際、生

まれてからまだ物心がつかない赤ん坊の時から成人になるまで、年を追いつつ成長していくことになる訳です。

私はそういった仲の良い、兄弟姉妹同様の若者たちを見てとても羨ましく思ったものです。とても彼らは自然に協力し合い、また良きライバルでもある。赤ちゃんの時から一緒に遊ぶから、良いところも悪いところも知っている仲間同士であり、その間には妙なはり合いやけんかをしたからといって、即分裂につながるというようなことはありません。特に私が感心したことは、男の子と女の子の間柄が実に自然で兄と妹、姉と弟、成人しては良き同僚同士というとてもさわやかで温かい関係である印象を受けることができたことです。このことは、十八才を過ぎて徴兵制度によりキブツを出て過ごす折にも非常にプラスとなる面でしょう。次に女性も男性も自分の成すべきことを自然に身につけています。

これは、キブツが醸し出している

全員で支え合っている姿勢にあるような気がします。具体的な例をあげ

ますと、子どもたちは就学する頃になると寝床もキブツ内にある教室(学校)のそばの寄宿舎にその部屋を持ち始めます。いよいよ本格的な集団生活を送っていくのですが、家族とのコミュニケーションも意識的に大切にしていけるものこの頃からのような気がします。朝、起床とともに当番制や分担任などで掃除をし、まず一時限の授業を受け、のち朝食を皆と一緒に楽しく食べます。これは大体小学生のパターンですが、キブツにより多少異なっています。

現在、キブツの方向性が従来のものから変化しつつあるのが実情です。で、一例としてご紹介します。私は、小学一年生の世話役として一日だけキブツの仕事として割り当てられたことがあります。とても楽しい経験でした。一時限の授業の間に世話役の私は大食堂へ卵や牛乳やパンを子どもたちの人数分取りにいきました。教室に戻るとスクランブルエッグを作ったりパンをフレンチトーストにしたり、多目的室のような広めのフリールームにテーブルを並べテーブルクロスをかけて、アツという間に食堂に変化させて、授業が終了のを待ちます。授業が終わると、生き生きとした表情の子どもたちが待つ

てました。とばかり席に着いて皿を取り食べ始めます。「牛乳を取って」

とか「僕、チョコ(パンに塗るペーパースト状のもの)がいい」と声を張り上げたりの大さわぎ、朝のエネルギッシュで楽しい始まりといった光景です。こういう一例をご紹介したのは、日本では今、朝食を食べずに登校する子どもが多いようですが、発育の面でも精神的にも好ましいことではないですよ。キブツの子どもたちには、まずこういうことはあり得ません。生活面から共同しつつ教育できる利点といえます。たとえ世話役といえども免許を持った教師の助手役も勤めなければなりません。食事の栄養面から勉強をみたり自習の監督までします。私はキブツにはめずらしい日本人であったため、子どもたちから質問攻めに合いました。箸の使い方だの漢字もどきの絵を描いて「ヤパーニ(日本語)」といっ

て見せてくれたり……。あの興味津々でキラキラした美しい瞳は今でも忘れることが出来ません。現在の中東問題の最中、あの生き生きとした子どもたちも成長し、次の時代のイスラエルを担う一人ひとりとして逞しく生きようとしている姿を思うと、祈らずにはおられません。

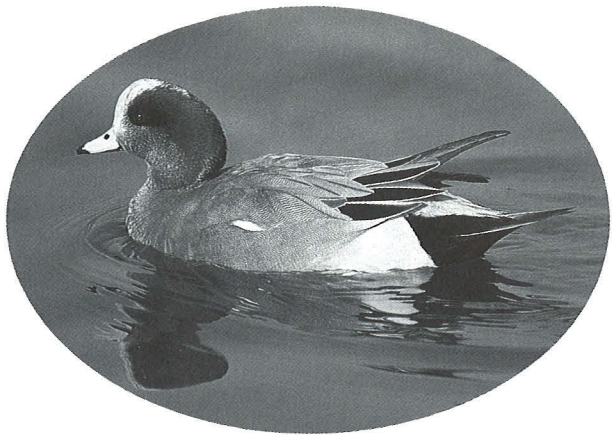
(完)

(株)モックス 細木建築研究所

土佐の野鳥 (三)

カヒ

山下 隆文



山の木々の葉が色づき始め、朝夕の寒さを肌感じる頃、カモ達は、渡りのピークをむかえる。

南国市十市の石土池、高知県内でも有数のカモの渡来地である。

現在は、十市パークタウンの遊水池となつているが、ここが住宅地として開発される前は、四方が小高い山に囲まれ、南に開けた湿地であつた。

丁度、開発によりこの池の水面が広げられた頃、多くのカモの渡来地であった高知競馬場の池が、移転のため埋め立てられる運命となった。

結果につながった。

人間と野鳥との一つの共存のかたちではないだろうか。

ここでのカモ達との良い関係を何時までも続けることで、野鳥との共存のひとつのモデルとなることが望ましいが、問題がないわけではない。毎年増えるハスが水面を覆い、年々池の水面積が減っている。この状態が続くとカモの渡来数が減ってくることも考えられ心配だ。

もう一つは、この池にはブラックバスという魚が多く、釣りファンに人気があり、釣人が一年中絶えることがない。

釣りをすることは結構なことだが、切れた釣糸をそのまま放置する心ない釣人が後を絶たない。そのため野鳥達の足に絡み付いたり、釣針を飲み込んだりする事故が考えられ心配だ。

この池を一回りするだけで一抱えの釣糸を回収する。この数倍が水中にあるとしたら、まさしく釣糸公害だ。もちろん一部の釣人だと思いが、自然全体を見る目を持つてほしいものだ。

この石土池でヒドリガモとならんで多くいるのがマガモである。どこでもよく見る一般的なカモで、狩猟の恰好の的になっている。マガモのほとんどは九月から十一

月にかけて越冬地に渡来する。

高知県の狩猟解禁日が十一月十五日だから、はるばる北の国から必死の思いで越冬地に着いた途端に、銃の的になってしまふのである。なんともかわいそうだ。鳥獣保護区や銃猟禁止区域に辿り着いたもののみ、やっと安心して、渡りで疲れた体を休めることができるのだ。

環境の悪化で生息地が減っている上に、人間の楽しみのために殺されるのである。悲しい運命ではないか。私の友人に、以前はハンターだった人がいる。現在は野鳥の会のメンバーで熱心に保護活動をしている。この友人に心境を尋ねたことがある。友人は、「双眼鏡で、野鳥達の懸命に生きる姿を見ると、撃つことなど考えられなくなった」といった。高知県は、人口に対する銃銃の所持は全国でもトップクラスだが、その数は年々減っているようだ。私たちにとっては喜ばしいことだ。

現在の鳥獣保護に関する法律は、狩猟を念頭においたものとなつている。鳥獣保護区も銃猟禁止区域も、要はすべて、狩猟のための設定の感が強い。世界的な環境悪化のため、生息地が奪われているカモ達のため、彼等が安心して冬を越せる真の保護地(サンクチュアリー)ができることを願っている。(写真家)

自然とのつきあい

西森 啓史



近年とみに環境破壊に関しての話
題が増えており、酸性雨、オゾン層
の破壊、水質汚染等、地球は大丈夫
か、と思わせる事柄が誌上を賑わし
ています。

何事も楽観的に考える性格の私で
さえも、危機感を持たざるを得ない
状況です。

我々の今ある社会システムを含め
て、自然とのつきあい方を真剣に考
え直す時期が来ており、その方策は
様々に語られています。

大切なことは一人ひとりが自然に
対し、いかなる意識を持って接する
かです。

その意識に一つの示唆ともいうべ
き観点が仏法思想の中にあり、「依
正不二論」という考え方がそれです。
「依」とは依報(よこ)のことで環境を意
味し、「正」とは正報(ただ)で、生命主体
を指します。個人に置き換えると「正
報」は自分、「依報」とは自分をと
りまく人々とか状況ということにな

ります。

「依正不二」とは生命主体と環境と
が、また自分以外のものが現象面
は別々であっても、体と影の如く、密
接に影響を及ぼし合い、その関係が
不可分であるということを表します。
この様な考え方に立つと、人間と
環境は一体のものであり、片方が悪
い行動をとれば、その見返りとして
しっぺ返しをされるということにな
ります。

考えて見ると人間はデカルト以来
「人間によって支配され、機械的に
定まっている」という自然観―機械
論的自然観のもと、近代科学を發展
させ文明の変化を実現させて来まし
た。その恩恵は非常に大きく、現在
の繁栄もそのお陰であるといっても
過言ではないでしょう。

しかし、事ここに至っては諸手を
挙げて賛同しているわけにもいかな
いと思います。
建築家・安藤忠雄はこういつてい

ます。「よく自然と対話するとい
ますが、自然と人間はそう簡単に共
生しないんです。もつと気むずかし
くて刺激的な関係だと思っんです。

つまり自然を引き込むと必ずデメリ
ットができるわけです。その中で格
闘しながら自然とい関係を持つと
いうことは、プラスもマイナスも両
方引き受けるということでしょう
：」(『芸術新潮』一九九三・九月号)

ここで注意すべきは「プラスもマ
イナスも両方引き受ける」というこ
とです。我々は欲望のおもむくまま
長い間、合理と効率の旗印のもと、
自然を思いやるでもなく、生活して
来たように思います。格闘しながら
いい関係を持つためにも、マイナス
を引き受けるだけのエネルギーとか
忍耐が求められているように思えて
なりません。

大切なことは、自然と人間が相互
依存の関係にあることを知ったうえ
で、我々がどう生き方を変えていく

かということですが。

欲望を拡大していく消費行動では
環境は益々壊されていくでしょう。
人間自身が自己をコントロールす
る生活のあり方が求められ、自然と
の調整者としての役割を負うという
自覚が必要であるといえます。大股
で歩いて来たがために、大切であつ
たはずのものを、置き去りにされて来
たものを今一度思い起こすことも可
知れません。

私は建築の設計に携わっています
が、建築物を造って行く際に大事に
したい視点が多々あります。建築と
いうのは様々なものが折り重なり、
組み合わせられてできる集合体です。
どこに重きを置くかにより随分と異
なったものになっていきます。

自然は人間の生命を蘇生させたり、
萎縮させたりできる力があります。
恵みを与えたり、時には怒りをぶつ
けたりもするでしょう。

建築は人と自然が本来の関係を保
つことのできる器であって欲しいと
希っています。

人の自然に対する意識が少し変わ
る時こそ、環境もこちらに顔を向け
始めてくれる時かも知れません。

秋の夜長、星でも見上げながら、
地球という生命体に思いを馳せてみ
てはいかがでしょうか。
(設計同人NEXT西森啓史建築研究所)

オペラをより身近なものに

吉岡勢津子

大学を卒業して、私は時間が比較
的自由に使えるピアノ教師の仕事を選
びました。それは、自由な演奏活
動やより良い音楽を吸収したいとい
う気持ちからでした。友人と年に数
回東京や大阪へ海外のアーティスト
の演奏会を聴きに出かける趣味をも
つようになりました。音楽会だけで
なく、バレエや演劇も好きだったの
で、短い日程にスケジュールを出来
るだけ詰め込もうとしました。

初めはピアノやオーケストラなど
器楽の演奏を聴くことが多かったの
が、オペラブームも手伝ってチケット
が高いいもかかわらずオペラを見
に行く機会が多くなってきました。
オペラでなくても、素晴らしい歌手
の歌う演奏会には出来るだけ行きた
いと思っています。

そして、今一番興味を持っている
のは「声」、「歌うこと」です。声に
興味があるのは、自分が一番わか

りのあるのが合唱音楽だからです。
う。合唱を始めた切っ掛けは、小学
校の時、ピアノを習っているから音
感がいいだろうというので合唱部
に誘われ、コンクールに出るために
懸命になったことでしょうか。中・

高とそのまま合唱を続け、高校から
は、並行して恩師橋本先生の指導す
る憧れのフラワーソングクラブに入
り、合唱は私の生活から切り離せな
いものになりました。歌の伴奏も中
学時代からさせてもらうようになり、
現在は合唱音楽を中心に伴奏ピアニ
ストとして活動しています。

そんな活動の中で、以前は見る側
にいた「オペラ」に、今度は作る側
として参加する機会を得ました。最
初は小規模な作品や部分上演でした
が、二年前高知を舞台にしたオペラ
『よさこい節・純信お馬』が前年の
東京公演に続き上演され、話題を呼
びました。この公演は東京のオペラ

団体主導で、脇役の一部とコーラス、
そしてオーケストラが地元の者でし
たので、主役は東京で、コーラスは
地元で練習する形になりました。私
は何回か稽古の時の練習ピアノをさ
せて頂きましたが、高知にはまだオ
ペラの演出や指揮が出来る人材がい
ません。でも、歌い手やオーケスト
ラは充分力を持っていると思います。
足りない部分は外からの協力を得て
稽古をしながら勉強し、力をつけて
いけばよいと思います。

近年、高知でも地元の人間の手で
制作された演劇やミュージカルの素
晴らしい作品が上演され、それが身
近なものになっています。

オペラも同様に、もつと皆に身近
なものになっていくって欲しいと思
います。あるオペラの中の有名な歌だ
けを取り出して、歌の発表会で歌う
ことは多くされて来ました。勿論、
歌い手は物語やその歌に関してよく
勉強されているに違いありません。

けれど、それは実際にオペラを体験
して歌われるものとは違っていると
思います。歌い手もそれで満足はし
ないでしょう。聴衆にもそれがいえ
ると思います。歌い手も聴衆も、オ
ペラをもつと身近なものとして学び
楽しんでもらうためには、定期的に
オペラが上演される必要があります。
オペラは総合芸術です。歌、芝居、

バレエ、音楽など、見る楽しみ、聴
く楽しみがいっぱいです。難しいと
思っても、慣れば楽しめるように
なります。

また、オペラを上演するには沢山
の費用がかかります。演出、指揮、
オーケストラ、美術(大道具)や裏
方など、舞台で歌う者だけでは出来
ません。

オペラ活動を続けて行くことは大
変なことですが、出来るだけ早く次
の公演が実現されるのを待っていま
す。



高知の財産としてオペラ『よさこ
い節』があります。是非早く地元の
手で再演されるのが望まれていま
す。

オペラ活動を通して、よい音楽環
境づくり、人材の育成を図り、それ
が高知の音楽のレベルアップに繋が
っていくことを願っています。
(フラワーソングクラブ伴奏者)

見る

土佐の祭りを訪ねて

佐喜浜俄と獅子舞

去る十月十日、当事業団主催バス見学会「土佐・祭り探訪―佐喜浜俄と獅子舞の旅―」で、佐喜浜八幡宮の神祭の行われた室戸市佐喜浜町を訪ねた。

室戸市佐喜浜地区は以前人口四千人余を有していたが、今では二千数百人、若者を中心とした人口流出で、高齢化も急速に進んでいる。

こうした中でも、なお地区の人々の努力によって昔ながらの神祭行事獅子舞と俄の奉納芸が行われ、地域に根づいた伝統芸能は見事に引き継がれていた。

かつて佐喜浜の氏子たちは山手を郷分、海よりは浦分と呼んでいた。

浦分には宿入りの制度があり、四つの宿が置かれていた。この半之丞宿、中宿、西宿、南宿は神祭にあたってトイヤがそれぞれ構える。そして奉能芸の獅子舞は中宿、俄は四宿の若者の役というしきたりがあった。

少年は十五になると宿入りをした。これにより浦で初めて一人前と認められ、一定の地位を与えられた。いわば元服にあたる。

若者達がここで共に食べ、語り、そして泊まるという近世から続いた宿入りの風習も、過疎化や住民の意識の変化によって昭和三十年代から



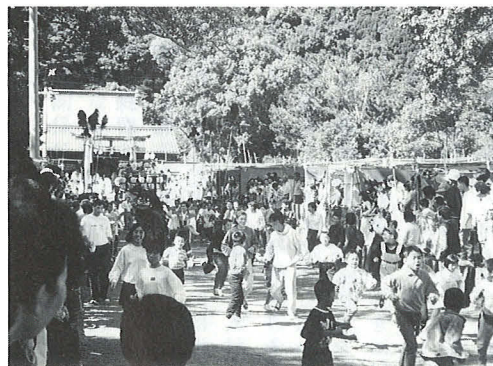
俄の奉納

くずれ始め、昭和四十二年ごろには解体した。俄の役はその年に宿入りした若者が必ず通らなければならない道であった。

しかし宿解体後はこの役も浦の青年会が、そして青年会も解体した今はそのOB会が引き継いだし、浦に限定していた分担制も取り外し、全地区参加の形をとっている。

古木に囲まれた参道両脇には、既に二十軒近い店がたち並び、見物席となる桟敷がさらに奥へと続く。

神事が終わって正午が近づくと、参詣者、見物人で境内周辺は埋まる。いよいよ「出の獅子」の奉納舞が始まる。若者二人立ちの獅子である。新人は先ず尻の方につくとというが、



獅子は参道を通り旅所浜宮へ

一カ月を要する練習も本番の舞も実にハードで体力を要する。

獅子は楽人の鼓と笛、締太鼓に合わせ荒々しい舞をみせる。激しい跳躍を基本にシラミをとる「ムナジラミ」等獅子の様を写している。無数に付けた鈴の音が「シャン シャン シャン シャン」と境内に響きわたるのが印象的であった。

俄は内容が新鮮で土地の言葉を使い、実名で語られ最後には必ずオチが付くというのが特徴である。そこには痛烈な時代風刺があり、ところどころに周辺の人々の行状が実名入りで、おもしろ可笑しくおりこまれたりするので、一寸たりとも聞き逃せない。

今年も室戸高校に在学する二人の高校生が志願して登場した。いわば小若衆の復活である。

「あれは〇〇ちゃんぞね」「がんばれよ」の掛け声の中で若者は燃えた。

おなばれが旅所浜宮から八幡宮に戻るところ、秋の日は既に西に傾いていた。

桟敷や参道脇の石垣の上に溢れる見物人から再び歓声があがり、獅子の動きに驚いて逃げ惑う沢山の子ども達の波も揺れた。

そして山車（だんじり）から出た若者により、最後の俄が演じられた。



第9回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

この 鋸目立中の話し 白木 友則

日常生活では、洒落や冗談などをよくいい、おもしろおかしくお喋りをしている人が、肝心の自分の考えや意見を言葉にして相手に伝えるとなると、どうも様にならないという人が意外に多い。気安いおしゃべりとの確かな意見の発表は別のもものらしい。

うちとけた会話は、表情とか、話しの間とかも、意思伝達に大きな役割をもっており、それが一体になって相手に伝わっていく。したがって戯曲のセリフのような無駄のないやりとりはしない。戯曲の会話は、対立や葛藤を目立たせるように書いてあるが、日常会話では緊張はむしろ嫌われる。

欧米の人達が、ときに露骨と思われるほど、ものごとをストレートに表現するのに対し、日本の場合は、含みをもたせる話し方を好む。頑固な自己主張は、調和をこわすものとして敬遠される。「雰囲気」を読んで「察する」、これが日本流対人関係の基本である。

「察し」の生活訓

風俗歳時記



このころよやく沈黙の価値(ねうち)が分かってきた、と友人のY氏はいう。いまは多言の時代で、言葉によって表現しないと通じない。その饒舌気味の風潮に、彼はある虚しさを感じているのである。その昔「沈黙は金」といわれたのも、こうした「察し」の人間関係が生きていたときの生活訓であった。

しかしいまはそうした謬も死語となり、世の中がぎすぎすして行くとともに、意思伝達もぎすぎすというてしまわれないと伝わらない時代になってきた。

(晋)

「土洋会」

時にはスケッチ旅行も

大黒 郁代



土洋会のルーツは？「市民学校洋画教室の卒業生が、少しでも上手になりたい一心で、寺尾孝志先生を講師にお願いして作ったグループである」と、いつもそこでハタと止まってしまうのです。もう十七、八年になるのかいやもう少し前なのかと、論議が分かれています。
発会当初からの会員も、記憶が定かでない位、年月を経た会になってしまっ
たという
ことでした。
こ
こ数年メンバーは変わらず、毎週金曜日中央公民館に集まり、それぞれが選んだ題材で勝手なことをいい合いながら、自由に描いています。油絵の面白いのは、ペタランの絵が初心者より素晴らしいとは必ずしもいい難いところです。
意表をつく色の組み合わせや、デフォルメされた造形にベテランが脱帽するこ
ともしばしばです。

「高知パッチワーク・キルトーズ協会」

布に想を映して

武市 育子



本会は、パッチワーク本来の「愛と友情」「助け合いと儉約」の精神に基づき、県下で活躍している先生方が集まり発足しました。組織づくりは大変でしたが、多くの方々のご賛同を得て、会員も一七〇名を超えました。会員の輪を広げようと昨年二月、第一回のアンデパンダン（自由参加、無審査）の展示会を多くの方々の後援を頂き郷土文化会館にて開催致しました。心配された作品も、沢山の力作が出揃い華々しく、見る人の心を和ませてくれました。入場者も四千人を超え、改めてパッチワークの素晴らしさに魅了されました。地味で気の遠くなる様な過程を経ながら、最後の一针を縫い終えた時のあの感動を、皆様方に伝えることが出来たと
思います。
無料講習
会も回を
重ねる度
に充実し
て来てお
り、人々
の出会い
も大切に
して行き
たいと考
えています。

俳句会

土佐の風土に親しんで

中西 克喜



昭和五十七年秋、当時の木村会館指導員横山佐和子先生の企画、澤村芳翠先生の助言により木村会館で俳句入門講座が始まりました。これが「あかつき」俳句会の実質的なスタートです。
また、
この講座
終了生で
OB会も
つくられ
ましたが、
このOB
会も一緒
になって
昭和五十
八年、OB
会第二
回目の句
会の時、
「あかつき」俳句会が正式に発足しまし
た。
入門講座、OB会とも私が指導にあた
らせてもらっていますが、講座は春秋の
二期に分けそれぞれ十回、午後一時半か
ら二時間行っています。句会のあとは講
義という内容で、和氣調々です。この講
座も今秋をもって第二十二回となります。
一方OB会は現在第二、第四水曜日の
月二回、同じく木村会館で句会を、また
時には郷土土佐の風土に親しもうと、吟

「高知子どものあそび研究会」

子どもの時代を思い出し

広松ひとし



いっつく たっつく たいもさん
たいもは いくらで ごさんす
と、車座になって円の中心に向かって握
って出した両手の人差し指と親指の輪の
中に、鬼が指を差し入れながら歌って順
に回って行く。
鬼が決まると笑いのどよめきで、また
繰り返されていく。
子ども時代に熱中したあそびだからこ
そよどみなくこの童歌が、このルールが
歌われ語られる。ルールや歌についての
研究、異なる部分などが披露され、ゲー
ムが深化されてくる。その土地土地によ
り、微妙な変化があるのが面白い。時代
の流れが色濃く投影されているものもあ
り、子どものあそびそのものも時代の外
にはないことが語られている。
メンバ
ーは現在
二十七名
旭文化セ
ンター
（木村会
館）にて
第二土曜
日の午後
三時から
五時まで
行ってい
ます。

散歩の途中で



県庁前電車通りの南側、中央緑地帯の中に六角形の道路元標が建てられている。昭和四十年に「一般国道の路線を指定する政令」が施行されたが、同時期にこの道路元標も整備されたものらしい。国道33・56・194・195号路線の起点、32・55号路線の終点となるこの道路元標、終日、車や人の往来を眺めている。

風俗

高知文学館へ

美術館をたて、県立郷土文化会館を近代文学館にする計画をうだしたとき、皆は県の発想とはからいに拍手を送った。だが最近では名称も高知近代文学館から高知文学館にかわり、中味についても、寺田寅彦を中心に、現役高知出身女流作家のものなどに力がこめられていると新聞にでた。

公共の文化施設は住民との合意、その意向に沿って中味も充実させていくのが望ましい。そういう文化施設は、そこに住むものの誇りとなり財産になる。
高知に近代文学館という声があがったのは二十年も前だった。だが現実はずま
ず要望はくすぶり続けてきた。そこへ県が

行も行っていきます。同会では会報の発行も行っていきますが、昨年二〇〇号に到達し、今春これを記念して第二「句集」あかつき」を発刊しました。現在会報も三三〇号となり、会員数は四十名です。
客観写生、花鳥諷詠の伝統を守り研鑽を続けてきましたが、その進歩は著しく俳誌「龍巻」の中堅作家を出し、また「ホトトギス」には多数入選するほどに成長しました。更に第三句集を目指し、一層の努力を一同誓い合っています。

連絡先 高知市曙町一三〇一三三
電話 〇八八八―四四一四三六一

第二回パッチワーク・キルト展
日時 平成六年二月十六日～二月二十日
場所 高知県立郷土文化会館
出展料 タペストリー部門 三、〇〇〇円
袋物等小物部門 一、〇〇〇円
受付 平成五年十二月一日、
十二月二十二日
小さな針仕事や布遊び、アトキルトなど沢山の作品をお待ちしています。

連絡先 高知市本町四一四二〇「ズムズム」内高知パッチワーク・キルトーズ協会
電話 〇八八八―二二一七五五七

写真は「ケンパ」のあそび、各人がやってみることから会が始まります。自分のルールが披露されるのもこの時です。
アツという間に二時間がすすんでいる状況です。
かつて子どもの時代に熱中したことが思い出され、話に花が咲いたところで、次回のあそびを打ち合わせしておわり。
屋内より外へ出るフィールドワークの計画も進み、子どもの中に持ち込み、共にあそぶ時間が楽しみです。

連絡先 高知市塚の原四三三三
電話 〇八八八―四四一四七九七

おそらく多くの県民はこの記事を見て、これが高知文学館の中味なのかと驚いたのではあるまいか。寺田寅彦も文学者のひとりとしてよい。全国の目は高知の文学体系、その深さ、豊かさ、明治期の日本文学の背骨ともいふべき中江兆民以降の今につながる高知の文学にむけられているといつていい。
それらの文学遺産、資料の収集展示こそ文学館の生命ではないか。展示はその県の文化認識、学術水準をそのままあらわす。
並べものではない質の高さが求められるのである。

県は文学館のあり方について、もともと県内文学関係者に理念、資料のありか、寄贈者の有無、展示方法、その他多くについて意見も聞かへきではないか。行政的発想こそ文化施設については必要なのである。
(睦)

第10回

高知市都市美デザイン賞 推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成5年1月1日から平成5年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦受付】

平成5年12月1日～平成6年1月31日

【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

【送り先・問い合わせ先】

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第10回 高知の映像コンテスト

写真展・高知を撮る 作品募集

【テーマ】高知を撮る

*高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

【応募】

- *どなたでも、一人何点でも応募できます。
- *ワイド四ツ切以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。
- *組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。
- *その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【賞】 特選 2点(賞状と賞金5万円、副賞)
 準特選 15点(賞状と賞金1万円、副賞)
 入選 70点以内

【作品展】

平成6年3月開催予定

【応募先】

- * (財)高知市文化振興事業団
- * 高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント 取扱店

【応募受付】平成6年1月10日～1月31日

第4回

高知出版学術賞

推薦受付

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版物を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

② 一九九三年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書二部を添え、審査委員会まで提出して下さい。なお、推薦書は請求下さいはお送りしません。

【受付期間】

一九九三年十二月十日(金)～一九九四年一月三十一日(月)

【表彰】

三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円を贈ります。

* 推薦・お問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。